368
228

368-228
1200600119829

幕末福岡藩
洋行の先驅

松下直美概蹟

大熊淺次郎編

(一)

始

368
228

筑紫史談第四拾四集　昭和三年九月三十日發行　拔萃

幕末福岡藩
洋行の先驅

松下直美概蹟

（一）

大熊淺次郎

368-228

幕末福岡藩洋行の先驅 松下直美概蹟（一）

大熊淺次郎

緒言

吾人の尊信する所の幕末福岡藩洋行先驅の一人者たる松下直美先生は、慶應三年藩主黒田長溥老公の拔擢に遭ひ、歐洲に留學し、歸朝後官仕し、多年我國法曹界の先達として令名あり。曾つて福岡市長に就任し、市政の發展に盡瘁せられ、後年更に朝鮮に就官せられし以來は、全く官海を隱退して閑雲野鶴の身となり、悠々餘生を送られたり。吾人先生の謦咳に接すること年あり、常に郷黨の先覺者として高風を仰ぎ淸談に遇き、心竊かに先生の行實を傳へ、後進の蒙を啓き箴戒に資せんと志すや久し。先生頽齢既に八十歳健康亦勝れざるものあり、時に病床に起臥し藥餌に親しみ、多く談話の困難なりしにも拘はらず、余の訪問毎に、喜んで昔日を談し、追懷を語り、殊に往年の洋行談に至りては誠に珍とすべく、時に或は筐底を探りて資料を提供せられ得る所尠からず、正に先生の概蹟を編せんとするや、寡聞未だ悉さゞる所あり、實歴の猶ほ闡かんと欲するものありしに病勢頓に革まり、客年五月十八日を以て遽かに他界の人となられたり。痛恨何ぞ堪へんや、葬を金龍寺（[illegible]）に送てより本年今日恰かも先生の一周年忌に遭遇せり、轉た追懷の念禁ずる能はざるなり。茲に斯忌辰に際し、不肖譾劣を顧みず、尙ほ調査を重ね先生の概蹟の一斑を叙し、特に往年の洋行事情を明にし、江湖の瀏覽に供せんとす。想ふに先生は夙に洋學を鼓吹し文化を啓發し、我國が始めて泰西の法律に則り、外國の敎師を雇聘して制度を布かるゝや、率先して通譯の任に當り、明治政府最初の司法に關與して法典の進歩發展に貢獻し、多年司直に盡瘁せられたる功績沒すべからざるなり、後進の士大に努めざるべからず、之れを緒言となす。（[illegible]）

昭和三年五月十八日

大熊淺次郎識

生立

松下直美は福岡藩士にして筑前に於ける洋行の先驅者たり、父は黒田家の家臣（一代役中直禮六石三人扶持）理兵太（初名惣五郎又甕助後蒼踏と改む）の長男にして母は八重南部家の臣白石忠右衛門の次女なり、嘉永元年十一月朔日福岡城南藥院八反田に生る、後ち風呂屋町（今の吳服町より西に移り職人町に出る橫町）に移り、又其町續なる西職人町濱手の屋敷に移る、後年現時の西職人町（濱町境の屋敷）に住したるなり。幼名悅太郎後ち嘉一郎と改め又駿一郎と稱す、後復た直美（ナヲミ）と改めたるなり。安政二年二月年八歳にして始めて福岡吳服町竹井範藏の寺子屋に入門し字を習ふ、同四年の春に至り漢籍を西職人町儒家高橋市之進に就て學ぶこと數年に及ぶ、後秀を以て呼ばる。（當時高橋門の四秀才松下嘉一郎[illegible]田喜平[illegible]貝原九十郎大西貫[illegible]なりと云へり（故松本俊之助實話））

禮法を土手町の矢野彌十郎に學ぶ、文久元年秋十四歳にして幾岡源六郎の門に入り劍法を學び、又同流濱與四郎に就て學ぶこと凡そ二年なり、十二ヶ條の目錄を得たり、同二年夏土手町石川雄兵衛に從ひ、拔心流躰術を學び大に得る所あり。

長崎遊學

之れより先き、父理兵太藩命に依り嘉永四年以來長崎詰方として屢長崎を往來し、安政六年に至り御茶屋御用受持添役仰付けられ、

寄贈本

一代役中直禮たりしが、其前年御仕法替にて一旦歸藩に際し、直美は十一歳にして父に隨ひて長崎に到る、父見る所あり時勢の推移する所を察し、夙に西洋の文物に接觸せしめんと欲し、通詞名村八右衛門に就て蘭學を習はしめたり、之れ洋學の端緒に就きたるなり。居ること數月にして小瘡を病み、翌六年己むなく歸國し、又た其翌萬延元年の春、父の病の報に接し、急遽出崎し父の看護に從ふ、全快の後歸國せり。夫れより藩地に在つては猶ほ漢學修業を怠らず、傍ら武術を修練する所あり、文久三年直美十六歳父の又た中歸りに際し、聞役岡村文右衛門に隨ひ長崎に再遊す、之れより愈洋學に志を立てたり、此度は先づ英語を學ばんと欲し、崇福寺の上なる廣福庵内越前藩士爪生三寅の塾に入る、三寅（天保十三年生、大正二年二月廿三日歿享年七十二）は福岡藩の通譯たり、同學には爪生震（嘉永六年生、大正九年一月九日歿享年六十八）あり、當時の塾長は林清康なり、又一方大井手町何禮之（天保十一年生、大正十二年三月二日歿享年八十四）の塾にては英語を敎へて之れと對立したりと云ふ。直美は又た江戸町廣運館に通ひて英語を學び英人フルベッキに就く、後ち英學より轉して佛語を學ぶ、平井儀十郎（後の希昌）及び都築某に就く、又た天主敎宣敎師レッケイに就て學ぶ、當時長崎に在りし人々には、鍋島藩よりは大隈八太郎（後の重信侯）石丸某、馬渡某、副島種臣、中野健明、堤某、阿波の芳川顯正、柳河の笠間準藏、曾我祐準、十時某、廣島藩の向井鐵太郎、土州藩の野村辰太郎（後の維章）中江篤介、高橋某なりしといふ。我福岡よりは平賀磯三郎（後の義質）を筆頭として青木善平、讃井大兵衛、栗野愼一郎、船越慶次、本間岩吉（後英一郎）水谷義次郎（後成佐）西川熊雄、吉見重次郎（後均）石松決（後の平賀義美）等の一列にして藩の留學生たりしなり。爾來各競ふて切磋琢磨の功を積む、慶應二年の末頃に至り、偶藩公の簡拔により、我藩の留學生中有爲の青年をして海外に派遣せしむるの內命あり、乃ち其選に當れるは、監督役としての平賀磯三郎（後義質）を始め青木善平、松下嘉一郎（後直美）本間岩吉（後英一郎）井上六三郎（後眞一）船越慶次の六名なり、之れ實に我藩海外留學生の先驅として、松下嘉一郎後の直美の登龍門は、實に此に開かれたるなり。

洋行準備 長崎發途

越へて慶應三年の春に至り、滯崎中の直美は洋行の準備を整へんが爲め、其年正月九日長崎より一旦中歸りをなし、豫て洋行の內命に就ては、萬事平賀磯三郎の指導を受け、歸藩後間もなく再ひ二月八日を以て平賀の出立と同時に、西川九馬雄、大塚仁平次、青木善平と同行し、福岡を出立し唐津經由長崎に赴きたり。當時長崎同遊の先輩富永貫治、金子才吉の兩人は恰かも中歸りの際とて、平賀、松下、青木等一行の洋行を壯とし、餞別として清壽丸を贈りたりと云ふ（此清壽丸は元島津家の傳來にして長溥公黑田家御入嗣の際薩摩より御土産として御持參藩士に頒かたれ後ち調製方を藩醫小野玄洋に特命せられたる名藥なり）此時相前後して崎陽に在りし新舊傳習生の面々は、金比羅山に於て會合し、始めて顏合をなしたるが、其人達は先づ平賀磯三郎を筆頭とし、手塚小吉郎、古藤吾助、大塚仁平次、村澤卯八郎、青木善平、船越慶次、井上六三郎、本間英一郎、上野友五郎、栗野愼一郎、吉見重次郎、水谷義次郎、村上研次郎、西川九馬雄、讃井大兵衛、石松決等を數へたり、就中拔擢せられたる洋行者の一列に至りては喜悅滿面意氣冲天の勢なりしと云へり。

扨一行の總べてが洋行の首途に就ては、暗中摸索の狀況にて全く東西を辨せず、各大浦なるフレンチ方に赴き、交る〲洋行準備に付て、萬端の指導を受けたるが、先たつものは旅裝の用意にてありき、藩の聞役よりは豫て洋服調達方に付き申談あり、フレンチに導かれては、出島の佛蘭西店又は賣肆に行き、洋服又は帽子及靴等を新調し、江戸町仕立屋に行ては洋服附屬の品々を誂へ、而して洋服の試着をなす杯、其恰好振に至りては隨分捧腹の事多かりしと云ふ。最早其年二月二十八日に至り、御國元よりは大早飛脚にて平賀に對し、急速に歸國の命あり、之れ西洋行の事に關してなり、依て平賀は其翌日長崎を出立し、歸藩の途に就きたるなり。越へて三月七日藩船大鵬丸は、藩より番手の面々を乘せて着崎す、平賀も此便船にて來崎したれば、一同は大に歡喜に充ち勇み立ちたりと云ふ。其月十二日に至り、聞役栗田貢よりは、家老衆名代として松下以下の面々に對し、此節語學修業として向ふ一ヶ年間西洋に差越さるゝ旨の御書附を相達したり、尤も平賀磯三郎のみは、國元に於て御達濟となり、乃ち一行は平賀磯三郎（平時四十二歳）、青木善平（三十二歳位）、船越慶次（十六歳）、松下嘉一郎（二十歳）、井上六三郎（十六歳）、本間英一郎（十五歳）の六人なり、但此達書は一ヶ年と認められたるも、實は三ヶ年の示命にして、父母親類の氣遣を慮り、之れが表向は一ヶ年とされたるなりと云ふ。而して平賀は此時又々御國元より命あり、其月十七八日頃再び歸藩したり、同二十三日に至り、平賀よりは松下に向けての大早飛脚あり、其書狀に曰く、洋行の義江戸表にて手捌の一條あり、且此節環瀛丸若松表にて米穀石炭等を積取り、江戸表に廻漕するに付き、三月廿八日を限り、陸路晝夜兼行にて六宿通或は唐津通にて若松へ到るべしとの申越なり。之れより先き、松下は既に洋行出立の日も相迫まりたることゝて、佛國領事等よりの彼國人への依賴狀をも整へ、滯崎中の親父の許に名殘を惜み、栗田聞役並に同學友人に別を告げて離杯を傾け、愈三月廿五日を以て長崎を出立することゝなりたり。同遊の手塚、大塚、上野、古藤、村澤、水谷、吉見、西川、栗野、石松、村上等の面々は餞別品を送りたるのみならず、殊に一同は螢流亭迄見送り來り、一路の平安を祈り分袂せりとなり。

旅程は先づ矢上驛を出で諫早、竹崎、多良宿、濱、本庄等山を越へ海を渡り、神崎、中原、轟、田代の諸驛を經て筑前路に入り、原田、山家、內野、飯塚、黑崎の六宿を過ぎ、同廿八日七ツ時半（今の午後五時）無事に若松に着し、惠比須屋（又米屋と云ふ）と云ふに投宿せり。直ちに環瀛丸乘組鬼塚勘五へ出會したるに、同船は前夜來入港したれば、乘船は何時にても勝手次第なりと言ふ、翌廿九日御用米石炭の積込みあり、明くれば四月朔日沖暴れ風強く乘船危し、翌二日に至り漸く乘船す、船將は松本五郎兵衛（中船頭百十石）乘組には上杉作右衛門（小船頭八石三人扶持）上田茂右衛門（小船頭十七石三人扶持）中山半八（同上十四石四人扶持）吉田清作（小船頭十石三人扶持）上田磯吉（小船頭十二石三人扶持）小島久之進（小船頭八石四人扶持）原田利右衛門（小船頭十石四人扶持）宮崎九八郎（小船頭八石三人扶持）等外數人にして、平賀磯三郎（御無足組十四石三人扶持）は此日晝過ぎ福岡より來着して直ちに乘船せり。三日に至り米炭積荷を了りたり、此日四ッ時（今の午前十時）小河縫殿（大組千百石）四宮孫次郎（大組八百五十石）白水白（御無足組十五石四人扶持）幾岡源六郎（定府御無足組十五石四人扶持）高橋主一（定府鉛術陸士五石三人扶持）

内海十郎、(一代役中直禮十石三人扶持)肥田喜平太、(定府御馬廻組百石)平野與兵衛、(御馬廻組百石義平男)古川俊平、(城代組九石三人扶持)山下祐、千葉鎔粲及び京都行の大野忠右衛門、(大組八百石)眞藤一郎兵衛(御馬役百六十石)も乘込み來り、一行同船の客となれり、船は愈三日の八ッ時(今の午後二時)若松を出で同五日九ッ時(今の午後一時)大阪に着船せり。京都行の面々は之れより上陸し、此處よりは又た天野彌三郎江戸詰として乘込み、松下等と行を共にするに至れり、松下は平賀外一同と共に一先づ上陸して、北安治川壹丁目笘屋定七方へ投宿し、八日に至る迄は阪地に逗留して諸所を見物せり、九日に至り一同は船に戻り、四ッ半時(今の午前十一時)大阪を出船したるが、同十日の晩景には志州鳥羽に繋船し、翌朝一同は此地に上陸し、道程三里の伊勢路に入り、宇治山田に至り、内宮外宮を恭しく參拜せりと云ふ。鳥羽は稻垣平右衛門三萬石の城下にして、同藩の家中には、既に西洋式兵術相開け、諸士の面々足輕等の手繰にて英式繰練をなせるの狀を見て、凡そ天下の形勢の推移する所を察知せりと云ふ。同十三日鳥羽を出船し、同十四日終夜遠州灘を航行し、四ッ時(今の午前十時)下田沖を通過し、同七ッ半時(今の午後五時)浦賀に繋船し、同十五日晝正午江戸灣に入港したり。此夜は船に宿し、翌十六日朝五ッ半時(今の午前九時)上荷船に依りて汐留に上陸したりと云ふ。

江戸逗留動靜

是に於て乎、松下は先づ平賀、青木、船越、本間、井上、古川、山下と同伴し、芝久保町萬屋治郎右衛門方に宿泊し、十六日暮六ッ半時(今の午後七時)に至り、櫻田霞ヶ關御上屋敷へ罷出で、恙なく安着の次第を言上せり、夫より松下の一行は即日御用所御木屋住を許され、當分入方賄の生活をなすこと丶なりたり。出府後は何事も不案内の事とて、江戸詰方天野彌三郎、(御馬廻組百七十石)大野辨太郎、(定府石高不明)大宮丰(定府御馬廻組百二十石)の萬事の指導斡旋によりて、一同は大に便宜を得たるなり、着後三日目に至り最年長たる平賀磯三郎は、一行なる松下及び青木船越本間井上に對し、此度御國元に於ける御軍事受持御用人より御達ありたる書面を披露に及び、此節の洋行は容易ならざる事にて、非常の御出財なれは、苟くも修業を怠り財貨を輕慢し、心得違のことなき樣にと戒められ、修業專一に心掛け、他日奉公の萬一に酬ふべしとの主旨を口達せりといふ。今其書面を擧ぐれば左の如し。

平賀磯三郎

此節西洋遊學被仰付候ニ付而者年長之儀に付遊學中若年之向術業筋ハ勿論財事取締方等引請主宰致シ何レモ心得方區々ニ不相成往々急度御用致シ候樣御教導可有之候事

松下は江戸逗留中四月二十日頃より不幸にして病氣に罹り湯本彦甫の診察を受く、約二十日間許床上に苦惱呻吟せり、之れより先き、四月廿一日には長崎同遊の先輩赤星研造(于時二十四歳)武谷椋山(于時二十歳)の兩人英船便にて、横濱に來着し江戸に來り、以後松本良順方に止宿せしが、偶五月六日始めて松下の宿所を訪問せしに圖からずも松下は病蓐に在り、未だ癒へず遺憾ながら充分の對談も意の如くならず、其儘相別れたりしが、元來兩人は平賀一行の洋行と均しく、豫て藩命により醫法を和蘭に學ばんとするにありたり、之れ一行の首途に先って、渡歐の途に上ぼらんとての告別にてありしなり。同八日に至り赤星武谷の兩人は使者を遣はし、今回好便船あるによりて、今横濱へ向け出立するに際し、再顔する能はざるを遺憾と

する旨を申越したりと云ふ。同月十三日に至り外國奉行より御留守居へ宛て、御印證(即ち今の海外旅行免狀)六枚を送り届け來れり、小河縫殿は早速平賀を呼出し、夫々本人に交付せられたるが、此の御印證こそ又見るべからざる珍しきものなれば、之れを記念として寫取り、家郷の親父の許に送り遣されたりと云ふ。

(洋行發程前江戸滯在中黒田藩邸櫻田霞ヶ關上屋敷玄關前撮影)

上圖圓内
藩主黒田長溥公
維新後の眞影
下圖
定府今井善八
同 不 明
本間英一郎(十五歳)
平野與兵衛
・・・・
松下嘉一郎(二十歳)
山下 祐
井上六三郎(十六歳)
船越 慶次(十六歳)
下僕久兵衛

因に記す松下日記に、慶應三年六月十七日古川御支闕前にて寫眞行はるとあり、之れなん同窗の先輩古川俊平(三十四歳)が長崎に於て傳習したる、寫眞術を應用撮影したるものなり、當時松下等青年の面影を偲ぶべし、之の人名順序は俊平の書付けたるものにして、今遺族の所蔵により複寫せり。

扨江戸滯在も最早一ヶ月をも過ごし、一行は只管便船の來るを待ち詫び、同二十日に至り平賀青木の兩人は横濱に赴き、乘船手續萬端の取調をなし、而して一方には皆々出立準備の買物に鞅掌せざるはなきなり。松下は諸種の買物の中には、五方通語、萬國指掌、佛語箋、法朗西文典、又は袖珍武鑑、新增四聲字林、其他雜部の書籍抔をも携帶せり。而して江戸滯在中同志の記念として、曩に長溥公の命に依りダゲリヤ術、後の寫眞術を研究したる、先輩古川俊平(于時三十四歳)の手によりて撮影すること屢々なり。

斯くの如くにして江戸滯在中種々の出來事あり、其動靜亦閑ならず、諸家を往來し各所を觀覽し、大に見聞を博くし資益する所尠からず。越へて六月に入りても未だ便船なし、偶其月二十八日に至り、某新聞の報する所を見るに、亞國客船「コロラード」は、當月廿四日横濱來着の豫報をなせり、然るに渡航周旋役たる横濱の何幸五郎(後の幸五、長崎の人通事たり元治元年より横濱に在勤す維新後神奈川縣書記官又工部省少書記官たり後年九州鐵道會社に入る明治四十四年頃歿す)の許よりは未だ何等の飛脚なければ其實否を確むるに由なく、扨ては此方より召使久兵衛と云ふを横濱に遣したるに、之れと行違にて左の如き書翰は、平賀青木兩名に宛て日本橋呉服町江戸屋仁三郎方屆にて送り來る、其文に曰く。

酷暑の砌に御座候處愈御安祥奉敬賀候先頃御來濱の折は諸事不行屆にて失敬のみ相働候段偏に御海容可被下候扨亞國蒸氣船飛脚コロラード船昨日入津仕候明朝は香港に向け開船の趣に御座候間不取敢右歸國の模樣問合候處矢張先前の通香港より當地に引戻し候日數凡二十日も相掛り可申候依之其以前に御用意御座候ても可然と奉存候尤も爲替金の一條は御都合次第可成急に御取極無之ては追々右船歸國前に相成候へば諸方繁雜可仕と奉存候間萬方右一條は

御済し相成候方便利宜布と奉存候實は勝安房守殿より被遣候學生三人より賴を受け諸事承り及び候處右之趣申聞候義御座候且又右三人は來月十日頃迄に當地に出張に相成候由に御座候此段御含迄申置度餘は拜顔の上萬々御相談可仕候　草々頓首

六月二十七日　　何幸五郎

尙以愚兄儀當月初旬に着濱仕當時出府罷在候間定て得拜眉居可申候と奉存候

以上の書翰到來と行違ひに、七月朔日久兵衛は横濱より何幸五郎の返事を齎し歸れり、乃ち此書翰に認めたると同様なる、亞國飛脚船コロラードは廿六日横濱に入津したるも、廿八日朝香港に向け開船したれば往復二十日間を要す、故に其以前に横濱に來り爲替金其他の準備あるべし、間際に至らば追々混雜すべしとあり。又勝安房よりは派遣の學生渡航に就ての依賴もあり、多分來月十日頃には來濱の由との事を申添へたり、一同は愈出立の期の迫まれるに心忙がはしく、七月二日は七ツ時(今の午後四時)頃より離杯を催さんことを約し、松下は平賀古川本間井上青木と同伴にて、山下町の北川亭なる鰻屋に赴く、此日丑の日なり來客夥し、平賀青木古川よりは別段の誂物あり、杯盤廻り座興大に加はる、翌三日には御木屋にても離杯をなし、晩景よりは左の面々に告別廻勤せりと云ふ。

原恒三郎(定府御馬廻組百十石)　淺田龍九郎(定府城代組十三石四人扶持)　白水白(定府御無足組十五石四人扶持)　今井善八(定府)　末竹伊右衛門(定府御料理人七石三人扶持)　岡村鋼次郎(定府城代組六石二人扶持)　生島周太郎(木詳)　天野彌三郎(御馬廻組百七十石)　小河專兵衛(鐵殿長男)　吉田太郎左衛門(御馬廻組百二十石)　永田直次郎(定府御馬廻組百石)　大野辨太郎(定府)　湯本彦齋(定府醫師十五石十五人扶持)　内海十郎(一生處仕組方十一石三人扶持)　四宮孫次郎(大組八百五十石)

江戸出立　横濱滞在

七月四日早曉、平賀、青木は御屋敷に赴き御引渡になりたり、之れは財貨入りの金箱にて、此度渡航に就て大切の荷物を御金藏より御引之れを車力に積載せ汐留に運搬して船送りの準備を整へたるが、之れぞ一行六人の一ヶ年分の暮料及御注文品の代金にて總計金一萬三百三拾四両の大金を封じ込み、内一箱は五千三百三拾四両入り、又一箱は五千両入りにて、都合二箱に荷造されたるなり。愈五ツ時(今の午前八時)に至り、汐留より乘船出立せんとするや、海岸には小河專兵衛、古川俊平、山下紘の面々見送り來り別を告げたりと云ふ。

四日夕七ツ時(今の午後四時)船は横濱野毛橋際に着したれば、松下は先つ使を横濱御役宅何幸五郎の許に遣し、而して平賀青木は自から戸部御役所に至り渡航の差圖を受け、松下は船越本間と共に船に居殘りて金箱を保管したりしが、平賀青木の晩景に至り戸部より歸り來るを待ち、漸く荷物の陸揚げをなし、金箱二個及衣櫃二箱を運搬し、吉田橋關門に至り鑑札を示して兩門を通行し辨天通前に至り此處に一先づ荷物を卸し置き青木本間は何幸五郎の許に行きて指圖を乞ひたるに、何幸は波戸場役場の泊番なりしを以て、下僕に命し宿手に案内せしめ、即ち辨天通一丁目福井忠兵衛と云ふに至る、是に於て陸揚の荷物は此處に運び込まれたるなり、船越獨り戸部附人と同道し、波戸場運上所に赴きて定役に面會し、手札及鑑札を示し投宿を報し、無程何幸五郎にも對面せり、何分大金入りの荷物を保管することなれば平賀青木は終夜不寢の番をなし、翌夜も松下と青木の兩人にて不寢番をなし、鷄鳴に及べりと云ふ。

同六日平賀青木兩人は何幸を訪ひ相伴ふて夷館に赴き、船賃を問へは上等客四百拾元なり、元直より廿四元直下せりとなり、宿の亭主に聞くに、今日の洋銀相場は百両に付百二十三なりと云ふ。松下は翌日青木同道何幸を訪ひ相談せるに、福井屋の話のみにては不安なり、豫て何幸の取引せる三井八郎右衛門の方の話によれば、夜前より今朝に至る間、百両に付百二十四半より五迄の直段なりと云ふ、又英の兩替屋にての相場は、夜前佛飛脚船着してより百二十三位なり、之れなれは何處にても兩替は出來るも、今數日相待たば下直に向ふべし、兎に角現金を三井の方に預入れの事に取極め、平賀は何幸と同伴し、即ち五千三百三十四両貳歩入りの一箱及五千両入りの一箱を三井に持ち届け、八郎右衛門に對面の後荷解をなし、端金三十四両貳歩丈は手元へ引取り、全くの預金高壹萬三百両丈の預り證文を請取り、此内三百両丈を即座に正金改めをなしたるに、惡金四両貳歩程這入り居りたりと云ふ。同十日何幸五郎來り謂へらく、爲替相場未だ明白せざるも昨今百枚に付壹歩三百貳拾六片位の見當なり、一昨日よりは三四片直上せりと、先づ此際船賃は三井に相談し、船問屋に拂込むことを何幸五郎に依托し、其計算船賃六人分二千四百六拾枚代金貳千四拾壹両三歩三匁、百元に付壹歩銀百參拾貳替にて拂込まれたりと云ふ。而して船規則により、船問屋よりは「チケツト」札各二枚宛を交付す、之れ一枚はコロラード乘船の際に用ひ、一枚はサンフランシスコ着船の際、船問屋に持ち行く事抔、何幸五郎よりは細々懇ろに船規則を敎へられたりと云へり。又何幸五郎の指圖により、海岸五拾六番スニツターチヤー方に至り爲替を取組み、引替手形三枚宛都合十二枚を受取りたり。其計算によれは洋銀六千六百六十六枚餘の三枚、又洋銀二千五百五拾五枚餘の三枚、平賀名義にて横濱より紐育迄の爲替狀として、但五人の紐育にての一ヶ年暮方料及注文物の金子を含みたり。又洋銀千三百三十三枚餘の三枚、之れは松下の名義にて横濱紐育間の爲替狀として、但松下一人佛國にての一ヶ年暮料を含み居りたりと云へり。又洋銀三百十五枚餘の三枚、之れは平賀名義にて横濱桑港間の爲替狀にして、又餘銀百五十枚は、桑港迄の船中用心金として現金を持參せりと云ふ。但し之等の總べてに對しては、横濱紐育迄は百枚に付十元の利息、横濱より桑港迄は百枚に付五元の利息を附加するの約束なり。

以上松下等の長崎を出發したるは、實に慶應三年三月二十五日にして、江戸に着したるは四月十六日なり、爾後江戸に逗留すること七十六日に及び、七月四日に至り横濱に來り、亦滯在すること二十餘日、其月二十五日愈横濱發程太平洋航途に上ぼる迄、足掛五ヶ月に渉り、百四十二日間を經過せり。之れにより之れを觀れは、往年洋行の困難なる尋常一樣にあらず、其便船を待つことの永き、其準備の容易ならざりしこと、而かも學資路用金の取扱の大切なる勘定計算の復雜なりしこと、余等明治末期(明治四十二年)の洋行事情に比すれば、渡航の難易實に霄壤の差も啻ならざるなり。當年洋行先驅者の苦心耐忍の狀想察するに堪へたり。

松下は江戸滯在中環瀛丸便に托し兩度親父の許に消息をなし、横濱滯在中に於て親父より返事を逡り越されたる左の書

翰に接したり、慈父の情紙面に溢るゝを思ふべし。

去る月九日十三日(五月なり)之書状去る五日(六月なり)環瀛丸着岸候鍛冶傳兵衞より相達披見候彌無別條御上屋敷御用所御長屋に當時入方住居被致候由致安心候將又道中大阪其外鳥羽より伊勢參宮其元所々見物有之由龍き儲にて御座候御印章も相濟候に付近日横濱の方へ被罷越爲替取組等有之右は格別隙取候義も有之間敷候得共盆頃にて無之ては便船有之間敷旨しかし其中幸便有之候はゝ可被參含之由被申越致承知候扣者にも去月十日長崎交代濟同所出立同十三日無恙致歸着候留元も無事に付安心可致致候

御印章富井御被鳩枝簪珍石文筒籠等(伊勢土産なり)被差越色々被存寄被差越致大慶候右何れも要用の品にて重寶之品に有之候得共必右等之心配無之樣存候印章富は文右衛門殿に吹譃入一覽候處御家老にも上候も御座候樣噂に有之候

四月廿六日七日頃より風氣にて一旦熱氣強く御同列の向も御世話御座候由しかし節句頃より筆取等も出來未たゆあみ等は不被致候得共五六日中には可被致趣何卒入念保養は可被致候此段は案し入候に候兎角勉強の内にも心を用ひ保護被致度存候其御地も不氣候の由此許も梅雨入より雨續にて今日に至る迄冷氣勝に有之候其表寒さの土地柄に付別て冷へ勝に可有之被察候帰にも持越無之不自由に有之たるにて可有之被存候就ては少々遣金にも差越度存候得共未た其御地滯留被致候哉難計候間先書狀而已申遣候何卒三ヶ年之間無事歸期相新事に候書餘申入度儀有之候得共難盡筆紙申縮候　恐々謹言

六月十日山笠　理兵　太花押

天氣模樣宜敷と飾り可申存候

嘉一郎殿

尙々平賀殿青木殿にはよろしく可被申述候青木より書翰來候得共不能貴報候條此儀も宜敷言加傳入候　以上

横濱發程 太平洋航途

愈出立の準備整ひ待ちに待ちたる亞國飛脚船コロラードは、七月二十三日を以て香港より横濱に入津したり。松下は横濱逗留中萬事厄介になりし、何幸五郎、名村貞四郎(松下の始めて蘭學を習ひし名村八右衞門元義初名貞五郎の相續者貞四郎元龍なり明治三年四月十二日歿享年三十歲)に別を告げ、翌二十四日には荷物積込み差配相片付け運上所に至り、午後四字半(四字は四時當時の用字)本船に乘込みたり。

本船は規則嚴正にして諸事整頓し華麗を極め、長さ約六十間幅八間許の大型船にして、船室は上等室十八を有し、一行は上室六番、七番の二室とを占有し、松下は青木木間と共に六番室に陣取り、平賀は井上船越と共に七番室に納まりたり。同船には瑞西國横濱駐在領事ブレンウォールド及同國の商賈アルヒゲル兩人乘組み、又同船の一行客には、勝安房の嫡男小鹿、仙臺藩の富田鐵之助(嘗つて日本銀行總裁たり)高橋和喜次(後の內閣總理大臣高橋是清なり)鈴木六之介(後の知雄)出羽庄內藩の高木三郎、薩州藩の伊東四郎(後の海軍大將元帥伊東祐亨)固葉英次郎、藝州藩の中尾某等乘組みたりと云ふ。又同船には函館駐在の英國領事カヲールの本國に歸るあり、又來朝中の蘭國海軍士官テキノー及びコーニン兩人の歸國するあり、此他藝人早竹虎吉等三十人乘組み居りたり、之れは幻術足藝の彼地にて喜ばるゝを以て、葡萄牙人タロサ亞國より歐洲へ興行に赴く一行なりと云ふ。船は二十五日曉方六字、大砲三發の合圖にて日本を後にし、桑港に向つて開船し、太平洋航途に上ぼれり。

扨同船中の前記ブレンウォールドは往年瑞西領事として横濱に來り、此度同國商賈アルヒゲルと共に本國に歸るものにして、ブレンウォールドは瑞西國ズリッカ市に生れ、獨逸語は素より英佛伊語を解し和語にも稍通じ、資性溫良にして博く事情に通じ懇切の人なり、松下は此人によりて旅行諸多の便宜を得らるゝこととなりたり。又同行のアルヒゲル亦能く和語を解したるを以て、懇ろに彼の渡航地の狀態を語り、自分の生國なる瑞西國ズリッカ市の地圖及び同國名所圖抔を示し通辯語を敎へ、種々なる便宜を與へたりと云ふ。船室には毎旦一僕ありて客の起き出づるを俟ち、寢具を斂め汚水を捨て淨水に易へ、手巾も亦取替へ硝子窓及び眞鍮金器に至る迄悉く拭磨し、十字(字は時なり當時の用字)までには船中の灑掃を畢り、上賓の使用に供し、食時至れば各賓は食堂に入り、食卓に着くが例なり、又毎旦掃除し了れば、司計(賄方頭取)船長を迎へて共に各室を巡監す、若し掃除到らざる處あれば、船長司計に命して之れを僕隷に理めしむ、船中の使用人は總べて支那人を使役す、是れ月給廉にして且性質柔順なるが故なり、航海中日曜日には必ず第十字に至り、銅鑼の合圖にて船長食堂に來り耶蘇宗徒盡く端座し、一時間聖典を讀誦して其日の禮拜を爲すと云ふ、爰に丁卯八月朔日平賀の漢譯したるコロラード船の規則を示さん。

太平洋飛檄汽船格律剌土室則

第一　夜燭至二十一字一滅盡不レ遺、但有レ疾者得レ請二於船主若司計一而後賓レ燭焉、其他一切不レ許。

第二　賓旅不レ許下就二亞室一、取中臥具於其房牀上焉。

第三　室中禁レ煙。

第四　犬獸禽鳥不レ許レ置二之房牀一、凡課二禽獸一頭二十五元。

第五　嚴禁二蹴博一、十一字後、併禁二伸戲一。

第六　就レ餐位地發船之後、徑附二記號一、各位要三相照以認二其席一、服飾齊整以就二食案一是衆賓當然之禮態也、衣裝不レ整者、不レ許レ就レ坐。

第七　食中求二酒若氷一者、請令二之鐘鳴以前一、既至二食時一、僕隷有職比レ及レ徹レ食。不レ得二外去一、此一則宜二特注恩一焉。

第八　賓客不レ得レ遊二東廂上若編艦外一焉、與二有司一謀二笑甲板一亦不レ准。

第九　禁下吸銃無二許可一而淺發上焉。

第十　有二舩難作一、船主諸司、舉レ心極レ力、以救レ死保レ親、實則自若也、行客賓之力作、無陽二無用一、反増二危險一而已、舟子各力二其職一、不レ得レ雜焉、唯致備整頓、應二船主求一而助焉、是所レ望二於衆賓一也、若夫爭取二桐筏一以求二生路一遺見二以自貽一レ憂焉耳矣。

火作之警

鳴レ鐘吹レ管、以報二火作一、航海之間、時々有レ之、是徒爲レ鍊二舟子一之警也、諸客是時毫勿レ懷レ懼、愛預白。

船到二聖弗蘭是斯一、監官未二來覲一、乘客不レ得二上陸一出入要下於二階頭一示中證札上。

行客謹慎勿三敢放二用陸物一、是緊二疾病一之道也。凡遺等物件禁レ帶二之船中一。轟砲在二出船前三十少時一。

僕隷或失二禮敬一或惰二其所一レ職、幸見レ告二於船主若司計一。

食室揭示

汽船格律剌土須知　供食如左

上室(朝食午前八字半、晝食正午十二字半、晩食午後四字半、吃茶夜八字)　亞室(朝食午前九字、晝食午後一字、夜食晩六字)

童子與二僕隷一供二別種飲食一。

各位食時求二酒及氷一者、願命二於鐘鳴前一僕隷侍レ餐、不レ得二外去一。

僕隷或失禮敬闕奉仕是非二其分一也、各位以告二計長一。

扨横濱發船の後兩三日の間、北緯三十五度三十分、東徑百五十度許の所を走り、日々北に向ひ北緯三十六度乃至三十七度より東徑百六十三度より百六十九度の間を進行し、氣候は殘暑未だ酷烈にして寒暖計は八十八九度を上下したりと云へり。松下は乘船より十日目の八月四日に於て、始めて日本服を脫き棄てゝ洋服に着換へ、之れより洋行姿と變じたり、又二十日目の八月十五日には平賀先生(一行は年長平賀に對し先生と尊稱す)は剪髮せり、之れ瑞西領事ブレンウォールドの勸めによるなり、之れより先き松下等は既に剪髮せしなり。船中の珍聞奇談亦尠からず。曩に松下は江戶出立前に當り、親父の許に書狀を寄せて最後の消息をなし、親父よりも亦家鄉の近狀を報し遣り、長途の旅行の安全を祈り、三ケ年間修學を了へ無事歸朝の日を待つべしとの來意なりし、松下は父の意を体して心に銘じ故國を顧念し前途遼遠かなり。渺茫たる太平洋上約四千五百海

里、此間絶て一個の島嶼を見ず、天氣清朗波濤靜隱にして實に太平の名に負かず、無難に航行を續け二十三日目の八月十八日拂曉、船室の窓を開き東方を眺むれは、遠霧模糊として水天髣髴の間、雲か山かと訝かり、甲板上より之れを見れば、最早船はカルホルニヤの港口に近きけるなり、時は午前の十一字漸く桑港の下、碇繫場に安着したるなりと云ふ。

米國桑港上陸

一行は直ちに上陸の準備を整へ、手證を引替へに手荷物を請取り、運上所收稅官來りて點撿を行ふ、ブレンウオールト及アルヒゲルの指圖によりて直ちに上陸し、一行はラシ街なるコスモポリタンホテルに入る、此ホテルは六階建にして室數二百七十を有し、宏壯華麗其設備新奇ならざるはなし、此頃の照明は未た電燈なくして皆瓦斯燈を點せしと云へり。勝の一行は別に「リツカハウス」に宿泊せり、松下はブレンウオールトに伴はれて市中の見物をなし、又アルヒゲルに伴はれて札役所に至り、豫て橫濱にて受取りし札六枚を渡し更に六枚を受取る、尤も之れは一枚に三人の名前を書き、當所よりパナマ迄の分一枚、同所よりアスピンウオール迄の分一枚と、紐育迄の分一枚とを合せて三枚を受領し、外に次に乘る所のメール・コンスチチユーションの引札一札を受取りたりと云ふ。カリフヲルニア街四百二十六番にローを訪ひて三百十五元七合五勺の爲替を受取り、又アルヒゲルと云ふ人來りて每事を斡旋し、ローは殊に親切に處理せりと云ふ、豫て長崎よりの紹介に係かりし、同地のマコンヅレイと云ふに出會し、豫めボストンの「ロクスボレ」のフレンチに、入國行程の次第を歐文電信（此時傳信機の字を用ゆ）にて報道を賴み、晝前には先方に通じ晚景には返事が來ると云ふ如き敏速なる通信機關の利用に驚かされたと云ふ。桑港に滯在すること五日間に及び大凡亞國の事情をも見聞することを得たりと云ふ。

桑港出立 巴奈馬發向

八月の二十二日に至り、頓て太平洋汽船コンスチチウシヨンに搭乘しパナマに發向せんとす、時は午前十一字轟砲の合圖にて桑港を開船し多數の見送人は帽子を脫ひて祝ふ、乘客は曩のコロラドよりも多く、上等客六十三人中等客四十二人にして內四十二人皆童子なり、船中の規則は多くコロラドに異ならず、船長は數年前南北戰爭の時、南部の大なる軍艦の船將なりしが、今は北部の飛脚船の船長に用ひられたりと云へり。

瑞西國より桑港に向け新聞紙の報道あり、アルセゲル曰く、歐羅巴に於ては佛蘭西、伊太利、墺國と孛國、魯西亞と魯國は六十日過ぎなば戰爭起らんとの噂あり、此他土耳其、魯國との混雜又イスパニア王取崩の騷動の記事を讀み聞せたり、船中亦快談と云ふべし。八月廿七日は既に北緯二十一度二十二分西經百七度五十七分の地點を航行す、橫濱を距ること二百四十三海里、時に寒暖計八十九度の暑熱燃くが如し、甲板に出でゝは涼を納れ、室に入りては高直なる氷を用ひて苦悶を遣り、夜半に入りて睡成らず、平賀先生青木も暑さに喘ぎ、皆衣を脫き去り苦熱言ふべからざりしと云へり。

偶乘組のブレンウオールド平賀先生に向つて言ふには、此度一行の遊學の目的地は、松下一人を除くの外は皆亞國ボストンに決定せり、然るに獨り松下のみは初めより物理學研究

の目的を以て、行先は佛國巴里なりと聞くが、巴里は世界第一の繁華の中心驕奢の都會地なり、此地に留學するには學生として修學費用も容易ならず、不適當の場所なり、寧ろ修學を續くるには瑞西に來るに若かず、此國は歐羅巴の中央なる小國にて、諸品は下直にして生活し易し、學問としては海軍術測量術等は宜しからずと雖も、其他の學術研究に至りては他國に劣ることなし、若し松下にして瑞西に來るの意あらば、佛語の出來る相當の學校もあれば、自分が導きて能き教師に就かしめ萬事を世話すべしと云ふ。是れより紐育に赴きたる後にて、佛國行の手蔓を求むるも容易に得難し、今此に決定し置くこそ得策ならずやと言ふ、アルヒゲルも亦之れに同意して瑞西に行くことを勸めたりと云へり。平賀先生は青木にも相談したる上にて松下に告ぐるにブ氏の言ふ如く、瑞西に修學せんことを慫慂す、松下思へらくブレンウオールドは至極質直の人にして己れの國を誇らず、只眞摯に指導せんとするにあり、ブレンウオールドの勸めに從ふこと最も安全なるべしと、談は巴里行を變更して瑞西に赴くことに決定せられたりと云ふ。

八月二十九日船はアカピユルコ（メキシコ沿岸）に入港す、此處にて石炭を積取りたり、小舟にてココナツト、パインアツプル、オレンヂ、珍貝等を賣り需き來るあり、黑奴水中に潛入して投錢を拾ふ抔の奇なる習俗を見る、桑港より此處まで千八百浬、之れよりパナマに至る千五百六十浬なりと云へり。翌晦日に至り暴風起り波濤高く、洋中根拔の樹木、靑竹、葛及ひ古材木幾何となく漂流し來るを見る、之れぞメキシコ領地十里の陸岸より、山崩れ高浪にて押し流し來れりと云ふ。平賀先生袂時計を以て器械の運動を試む、一ミニユツトの間十度を運動せり。九月五日（陰曆九月朔日）午前十一字パナマに入港す、松下は先づ大切なる金子二包を預り、懷中の爲替狀は竹筒に入れ、胴亂に收めて肩に掛け、一行と共に上陸して直ちに用意せる火輪車に乘込みたり。客車は竪六間橫二間半中通に道を明け、二人懸りの椅子を左右に併立し、各十二人宛一車人員四十八人乘にして、客車貨車機關車等十二臺を連結せりと云ふ、驛前には黑奴夥敷く集り來り、一行を珍しげに見物せり、午後四字頃車はパナマを出發す、之れ所謂巴奈馬地峽の橫斷なり。

巴奈馬地峽の橫斷

車は山間平野の間を疾走す、車窓より沿道の光景を望めは、恰かも日本の田舍の貧民窟に彷彿たるあり、熱帶圈内とて黑人住居の結構は、遙かに日本より劣れるを想像せられたりと云ふ、轍道（鐵道なり）は樫木を以て角に削り、一間許りに切りて一尺五寸許每に間隔を明け、其上に鐵線（軌條なり）二ツを敷き、傍らに里數標を建て、又其轍道の傍らには傳信機を建て連ねたりと云ふ。其日晚景六字頃アスピンウオールに安着し、始めて大西洋岸に出でたり。パナマより道程僅かに二十里なり、（我里程）此處には既に飛脚船の用意あり、一行は直ちに乘船場に至り、飛脚船ライジングスタ號と云ふに乘込み、客室は二段目の第三十六番と第三十七番の二室を占領したり、此船は太平洋滊船コロラド又はコンスチチユーシヨンよりは、遙かに壯麗完備せりと云ふ、明くれは九月六日（陰曆十月二日）の曉一字半頃、船は紐育に向け解纜し大西洋航途に上ぼれり。（當時米大陸には東西貫通の鐵道なし）（未完）

鐵道交通界の恩人
本間英一郎先生の一周年

大熊淺次郎

我福岡の先覺として我國鐵道企業界の權威たる、本間英一郎先生逝ひてより正に一周年、顧みれは先生客春來病を信州輕井澤の別墅に靜養し、踵て東京慶應病院に療養し名醫の診療家人の看護至らざる所なかりしが、藥石遂に効なく客年九月二十九日溘焉として他界の人となられたり、享年七十六、何ぞ追惜に堪へんや。

余や先生に始めて相見へしは、曾て余が博多商業會議所に就職せし頃にて、過ぐる明治三十二年十月第八回全國商業會議所聯合會の東京に開かるゝや、時の會頭小河久四郎氏と同道出京の砌、偶其月十二日赤坂區田町八百勘に於て福岡縣人懇和會を催さる、會するもの金子堅太郎、太田峰三郎、寺尾亨、頭山滿、福本誠、本間英一郎、團琢磨、金山尙志、濱地八郎、淺香茂明等の諸氏にして、余等亦招かれて末席を汚がすの榮を荷ふ、之れ實に三十年前の事に屬し、余の始めて本間先生の謦咳に接したるは此時なり。後年余が船越鐵道會社の事務に鞅掌したるの時、又先輩村上義太郎氏の今津灣築港計畫の當時に於て、先生に相逢ふの機會を得て欵語崇敬の念を深ふし、爾後松下直美先生の、往年の外遊談に敎へられたる洋行先驅の一人者として畏敬の念に堪へざるものあり、玆に先生の一周年忌辰に遭遇し追懐の念禁する能はず、一言追悼の辭なかるべからざるなり。

先生は我國鐵道技術の開祖にして、世讃へて以て宗教界に於ける眞宗の開祖親鸞上人に擬し、曾つ鐵道院副總裁たりし長谷川謹介氏を顯如上人に比し、兩者の鐵道開拓の功業を併稱せり。先生の功業の偉大なる、彼の有名なる碓氷峠のアブト式隧道開鑿の如き、幾多の難工事を完成し、斯界の進歩發展に貢献したる功績は、我國交通史上に異彩を放てり、誠に尊敬すべきなり。

米國留學中の撮影

(右)本間英一郎　井上良一(左)

玆に亦先生の尊むべきは、幕末我福岡藩洋行者として文明皷吹の一線に立たれたるを思ふべし、顧みれば先生は慶應の初年長崎に遊學し、何禮之の塾に英語を學び、同三年三月に至り藩主の拔擢に遻ひ洋行を命せらる、其一行は先づ平賀磯三郎(後の義質)を筆頭とし、青木善平、松下嘉一郎(後の直美)井上六三郎(後の良一)船越慶次と及び先生の六人なりしが、先生は最年少者として

干時十五歳の俊髦なりき、實は此年五月武谷椋山赤星研造の兩人先つて和蘭に留學したりと雖、之れ唯出發の前後を異にしたるのみにして、實に先生等の洋行は之等と共に我藩の最も先驅者と謂つへきなり。一行の總べては米國ボストンに留學し、獨り松下のみは歐洲に渡り瑞西に留學したるが、一行は曾つて横濱に在りしフレンチの世話を受け、亦先に同地に來り其地の事情を熟知せる岡山藩の花房虎太郎（後の義質）の指導により、井上と先生とはリードの家に寄寓して修學する所あり、學業大に進む、後ちボストンより隔りたる有名なるアマストの家塾に轉し、爰に修業すること一年許にして、又ウースターの兵學校に入り、後ち井上は相別れてハーバート大學に入り法學を修め、先生はマスサッチウセッツ州工藝學校に入り、四年間刻苦勵精業を卒へ、明治七年七月干時二十二歳にして井上良一と共に無事歸朝せられたるなり。

之れより先き、先生等の留學に就ては僅かに一年有半に充たざるに當り、本國よりは歸朝の命あり、之れ維新匆々藩の財政窮乏し、學資送付の不可能を以てせり。是に於て乎一同は中途廢學の已むへからざる事情に遭遇したるが、松下は明治元年十二月を以て、先づ瑞西を引上げ歸途米國に立寄り、一行の廢學を悲しみ後圖を議する所あり、松下曰く王政維新天下の形勢は一變し、逡巡すべきの時にあらず、自分一人先づ故國に歸り、藩主家に歎願し、是非共學資繼續の事を以てせんと、此時青木船越の兩人は事故により既に歸國したれば平賀、井上、本間の三人殘留し、松下は米國を出立し、翌明治二年五月十八日横濱に歸着し、直ちに登京霞ヶ關藩邸に伺候し、藩主長知公に謁し、在外留學生の現狀を具陳したるに藩の財政多端困難の故を以て學資給與の懇請叶ひ難く、先きに歸朝したる花房虎太郎は松下の請ひにより、此間に大に斡旋し井上本間兩人は明治政府海軍寮の官費生として留學を繼續することゝなりたり、而して唯り平賀氏のみは、長溥老公の御思召により特別詮議となり、學資仕送りの事決定し、三人共に遂に留學の目的を達し、後日各其名を成すに至れるは、偏に同遊松下先生の友誼に厚き盡力の致す所にして、當時洋行事情の容易ならざりしを察知すべきなり。

先生業を卒へて歸國の後は、先づ海軍寮の御雇となり通譯に任したるが、僅かにして之れを辭し、赤坂福吉町黑田家中屋敷内に私塾を開き、井上良一と共に英語を教へられたりと云ふ、故鶴原定吉杯は教へを受けし一人なり。明治八年に京都府御雇となり、道路改修河川橋梁の土木事業に從事し、明治十年頃福岡縣令渡邊淸氏は京都府知事槇村正直氏に要請し先生を我福岡に招き、陣乃五と共に博多灣内の海底深淺測量をなさしめ築港設計圖を作成し、內務省御雇蘭人デレーキ氏其議に與かりたるは此時なり、之れ實に博多灣築港の魁をなしたるものなり。同十一年京都府を辭し、翌十二年井上勝鐵道局長の勸めにより鐵道局に入り、長濱敦賀間の鐵道敷設に從事し、同十六年敦賀より直江津に至る鐵道を設計し、其後直江津より上野間信越線、青森より弘前間奧羽北線の設計をなし、殊に碓氷峠アプト式の設計は、全く先生の創意に基つき之れが計畫を決行したり。同二十六年鐵道局を辭して後は本間鐵道工業事務所を日本橋區兜町に設け、私設鐵道の設計請負等を營まれたり、此間坂鶴鐵道にも關係し、北海道炭礦鐵道會社の顧問となり、總武鐵道會社々長となりて斡旋する所あり。彼の明治二十八九年の頃、我船越鐵道の發起計畫せらるゝや、之れが設計は一切先生の手によりて完成されたるものなり、今吉塚篠栗間の一線は、其一部の實現を殘せるものにして、多年の懸案たる大分鐵道は正に船越案の延長せるものと云ふべし。又同三十年より三十二三年間に涉りて、彼の村上義太郎氏の首唱に基づく今津灣の築港設計は、石橋絢彥博士の該博なる調査實驗に成り、之れが連絡鐵道の設計及築港全體の製圖は、實に先生の技術考案に成りたるものにして、本計畫は爾後實現の域に達せざりしと雖、後年博多灣築港計畫は、一に本調査を參考し、之れによりて多大の便益を享けたるものにして、該調査は斯界の權威として永久に傳ふべきなり。

我國が鐵道國有制を布かるゝに至るまで、先生は殆んと三十有餘年間鐵道事業界に盡瘁せられたり、實に鐵道交通界の一大恩人として、亦筑前の先覺者として敬意を表せざるべからず。

嗚呼往年の洋行者にして僅かに現存せるは、松下本間兩先生のみなりしが、客春松下先生先づ逝き、尋て客秋本間先生を失ふ、復た昔日を談するに由なきなり、彼を思ひ此を思ふ一掬の涙なからずとせんや、茲に先生の一周忌辰に當り、聊か先生の生前の事歷を回想し、追悼の意を表するものなり。

（昭和三年九月二十九日記）

368
228

368
228

終